投稿

卒業後39年間の会社人生をふり返って
― グローバル化時代を迎えて伝えたいこと ―

工業化学科54年卒　藤井　昭則

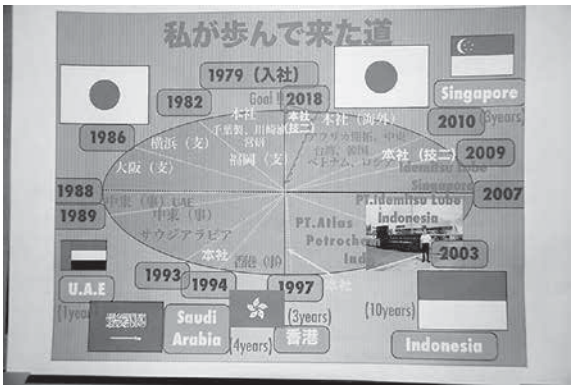
1．自己紹介

昭和54年３月に山口大学工学部工業化学科を卒業して、石油会社である出光興産㈱に入社。オイル（機械油、自動車用油等）を取り扱う潤滑油部に配属され、以降、国内９年、海外30年間（このうち、UAE、サウジアラビア、香港、インドネシア、シンガポールの５カ国に21年間駐在、その後、アフリカを中心に新規潤滑油ビジネス開拓を担当）勤務。平成30年３月に退職し、現在、福岡に在住。

2．会社人生で学んだこと

山口県徳山市（現、周南市）の商家に生まれ育ち、漠然と学生時代を過ごしていました。卒業後は山口県内にある化学系企業に就職して山口県で一生を終えることを考えていた私にとって、入社後の人生は途中から全く予想しなかった海外の方向に向かい、退職するまで海外の仕事に携わることになりました。入社時にはまさか自分が海外で仕事をすることになろうとは想像すらしていなかったのですが、今ふり返ってみると結果的に海外で仕事ができたことで世界を知る機会にもなり、とても幸運だったと感じています。おかげで、退職後の今も海外への関心が高く、米中貿易摩擦やBREXITの動向等、変化の激しい国際情勢を興味深く見守っています。現在、少子高齢化が問題化している日本においては、グローバル化という言葉を毎日耳にするほど、海外との距離間が近くなっているため、今後はますます海外で仕事をする機会が増えてくるものと思われます。自分自身学生時代に何も準備をしていなかったという反省もありますのでこの辺りについて自分の経験を踏まえて少しお話ししてみたいと思います。

入社後は東京（本社）、横浜支店、大阪支店の国内勤務の後、ある日突然、海外転勤の辞令が下りました。しかも、任地は中東のUAEにある中東事務所でした。現地には原油調達の仕事で駐在している社員はいたものの、潤滑油販売について相談できる人は一人もいないため、「自分で判断することが求められる仕事」であり、私にとっては大変厳しい環境でした。しかし、「自分しかいない」との想



いが強くなり、やりがいというものを強く感じたことを覚えています。

ビジネスは英語ですが、苦労の連続でした。着任早々、関係先の工場に勤めるパキスタン人から電話を受け、彼が何の話をしようとしているのかさっぱり理解できず、何度も聞き返していたら、遂に電話を切られてしまったという苦い経験があります。上司の所長は、すぐに状況を察して自分の車と運転手を貸してくれて、「現場に行って直接相手に会って来い！」との指示。２時間ばかり車で走って現地に着くと、突然の訪問でしたが、相手もすぐに状況を察知して、驚きと感激で喜んで迎えてくれ、私に電話で伝えたかったことを一つ一つ丁寧に紙に書いてわかりやすく教えてくれました。そして、この出来事はその後の私の人生にとても大きな影響を与えることになりました。この事件で学んだことは、

『現場で顔を合わせて（Face to Face）で話すことが大切』

『外国人でも誠意を示せば、言葉は通じなくとも心は通じる』

『日本以外の異文化に数多く触れ、経験することが大事である』

であり、喫緊の課題であった「英語の習得」と共に、しっかりと肝に銘じました。もちろん、彼とはその後もとてもよい関係をキープすることができました。

サウジアラビアではパキスタン人の社長を筆頭に、サウジ人、インド人、イエメン人、パレスティナ人、エジプト人、スーダン人、ジプチ人、エレトリア人、イギリス人、それに東南アジアから唯一日本人の私という組織の会社で仕事をする機会があり、多くのイスラム教徒の仲間と一緒にここで約４年間、仕事をしました。 日本人が自分一人だけというマイノリティー環境において学んだことは、日本人の得意とする「阿吽の呼吸」は全く通じないということでした。自分が話をする前に相手が私の話を聞くための下準備ができているのか、つまり、基本的な情報等、頭のインフラ整備ができているのかを考えた上で相手の状況に合わせて論理的に話を展開していかないと伝わらないし、お互いに理解し合えないということでした。 特に自然環境をはじめ、文化、宗教等が異なる外国人との会話ではこの点に充分に気を配る必要があるということが身にしみた駐在でした。

シンガポールでは、シンガポール人と太平洋戦争について知っていることを話し合っている時、事実認識にかなりズレがあることに気づき、それ以降、シンガポールの国立美術館を10回近く訪問し、シンガポールの歴史の中で日本との関わりについて、日本では知ることのなかった事実にスポットが当てられている等、外から見た太平洋戦争の一面に触れるという経験をしました。この経験を通して物事を一面からではなく、様々な角度から見ていくことの重要性を学ぶことができ、その後、自分自身も一方的な見方から徐々に多面的な見方ができるようになってきたように思います。

南アフリカでの印象的な出来事は、ヨハネスブルグ市内の有名レストランで従業員に世界の白地図を見せて、「日本は何処か知っている？」と聞いた際、誰も知らなかったという事実に驚くとともに、改めて極東の小さな島国日本を思い知らされたことです。当時、出版されて話題になっていた『Japan as No. 1』の影響を少なからず受け、世界中の人々が日本に特別な関心を持っていると錯覚していた自分を恥ずかしく思った経験があります。

このように、私が海外で経験したごく一部をご紹介しましたが、世界はIT全盛時代に入り、更に通信速度が今の10倍と言われる５G時代を迎えようとしており、グローバル化

がますます加速するものと思われます。そこで、自分自身の海外体験を基に、大学在学中に習慣化しておけばよいのではないかと思うことをほんの一部ですが、述べてみたいと思います。

３．自分自身の海外体験をもとに思うこと

１）歴史認識（近代史）を持つ

日本が外国との交易を本格化させた明治以降の近代史について、多面的に理解して自分なりに整理しておくことです。私自身、外国で日本（自分の国）の近代史を聞かれてほとんど答えられないという、恥ずかしく苦い経験をしました。特に、開国以降の歴史（日本及び諸外国との関係）に興味を持ち、歴史本の読書、歴史DVDの鑑賞、歴史記念館等を訪問して自分の肌で感じ、学ぶ習慣を身につけるとよいでしょう。

２）外国語（特に、英語、今後はできれば中国語も）に慣れ、同時に国際情勢を知る

大学での授業だけではなかなか難しいので、例えば毎晩21時のNHKニュースや、BS放送で世界各国のニュース（英国BBC、米国PBS、オーストラリアABC等）を音声多重放送で録画し、日本語と英語の両方で繰り返し聞き、内容を把握するなど、外国語に触れる機会を自分でみつけ、習慣化するとよいでしょう。各国の動向を知ることもでき、異なる英語（発音）に慣れることもできます。言葉はあくまで伝える手段なので、国際情勢等に興味を持って、世界の主な話題についていけるようにしておくことも大切です。見知らぬ外国人を見かけたら、勇気を出して「声かけ」（挨拶でも結構）をし、自身の中にある日本人、外国人の壁を壊してグローバル人材を目指してください。

ほかにもたくさんありますが、これらは日本にいる間にわずかな時間を使って身につけることができますし、あとはやるか、やらないか、要は『本気度』です。私は定年退職した現在も習慣化しており、日々実践しています。外国語はあくまでも物事を伝える「手段」の域を超えませんが、日頃から触れておくことで、即戦力になります。是非、実行されることをお勧めします。

最後に、30年間にわたり海外ビジネスに携わった私の英語ですが、外国人には相当聞き辛い「山口弁訛りの英語」であったことは疑いのない事実です。それでも世界で仕事をすることができました。「山口弁訛りの英語」でも恐れることはありません。気持ちは「Go for the Break！」（当たって砕けろ！）ですね。これからのグローバル化時代に向かって皆様のご活躍を期待します。

「常盤」84号　原稿募集

会員の皆様より広く、「常盤」の原稿を募集しています。些細な近況報告から随想、思い出等皆様からの寄稿をお待ちしています。

次号「常盤」84号（令和元年12月発行）の原稿の締切は、令和元年９月20日です。